

## オオタニ

東京都立南多摩中等教育学校 4年 佐々木 由宇

「大谷になりたいなあ」

ぼろっと出てしまった言葉に、自分でも驚いていた。

「は？ 何言ってるの。お前そもそも大谷だろ」

吉永がスマホから眉をひそめた顔を上げる。

「ちげーよ。いや違うはないけど、翔平のほうだよ」

俺のスマホには、大谷がホームランを打ったという新着ニュースが表示されていた。

「俺はホームランを打ちたいわけじゃないんだよ。人として大谷に近づきたい、人から褒められて感謝されたい！」

吉永がフツと鼻で笑った。視線はすでにスマホに向いている。ハリー・ポッターみたいな丸眼鏡が光ってうざい。

「へーいいじゃん。少なくとも俺の見る限り何の努力もしてきてないようなお前が、翔平になれるモンならなってみなよ」

むかついた。加えて大谷に慰められたって治らないくらい傷付いた。

こいつだけは許さない。俺がもし大谷になったとしても、許せない。死ぬまで丸眼鏡と薄い毛根をいじり続けてやる。

大谷が高校生の頃に作った『目標達成シート』というものがある。「ドラフト会議一巡目で八球団から指名を受ける」ことを中心とし、それを達成するためにやるべきことが書かれている。これを参考にして、俺もシートを作ってみることにした。

中心は「大谷翔平になる」。次に、これを達成するために必要なことを考えていく。まずは「人にやさしくすることだろう。そうすれば感謝されるに違いない。続いて「先生と仲良くする」。大谷はいかにも優等生そうだし、人脈を広げることもなる。ほかに「困っている人を助ける」「ボランティアに参加する」「周りをよく見る」など、関連しそうなことを書き込んでいく。

シートが完成した時すでに俺の二分の一は大谷になっていた。大谷マインドが備わり始めていた俺はその日九時に就寝した。

朝学校に行く俺の机の周りが声の大きい集団で囲まれていた。いつもならオロオロしながら吉永の席へと避難するのだが、もうそんなことはしない。息を吸い込んで、

「おはよう！」

と挨拶をする。きつと大谷もこうした。

声の大きな彼らは別に悪い人たちではなく、ただ声が大きいただけなので「ああ、すま

ん」と言いながら席を離れていった。

授業中も姿勢は正しく、先生にはこやかに挨拶をし、誰かが落とした消しゴムを誰よりも早く拾い渡してあげる。もう大谷の血が自分の中に流れていた。

「お前どうした」

昼の時間になり、吉永が机を合わせてくる。

「俺は大谷になると決めた。決めたからにはそれ相応のことをする」

「ややこしいな。お前自分も大谷だってこと忘れんなよ」

弁当を開くと色とりどりの野菜と形の崩れた卵焼きが入っていた。初めて作った弁当にしては上出来である。

「いいかい吉永君。私は今大谷になるという努力をしている。君はどうかね。人のことを散々罵っておいて、君は何か努力をしているのかね！」

丸眼鏡をくいつと上にあげ、吉永はため息をついた。

「君がその道を選ぶのなら、僕は何も言わないでおこう。いや、一つだけ言わせてもらう。君も、大谷だ」

俺はその後も「大谷」を続けた。誰よりも早く学校に行ったり、道端のごみを拾ったり、常に心身ともに健康であるように生活した。廊下ですれ違った先生から「最近よくやってるな」と言われるようになった。クラスの女子の会話が聞こえて、「大谷？ ああ、良いやつ止まりね」と言われるくらいには良いやつになった。

俺は錯覚を起こしていた。自分が大谷なんじゃないか。俺がいることでみんな幸せになる、希望をもらえる。この世界は自分を中心にして回っているような気がした。

まるで大谷にバットで頭をぶん殴られたような感覚だった。本当は、大谷がWBCの最後に帽子を投げたみたいに、俺が今持っている紙も遠くにぶん投げたかった。

でもそんなことしたら、バレル。俺の、成績が。

どうして。なぜこんなにも、低い。なんで、オール3なんだ。こんなに一生懸命やってきたのに？

顔から、血の気が引いていく。俺は、「大谷」になれない。どれだけ頑張っても所詮は良いやつ止まりで、声の大きい集団に入れるわけでもなく、かと言って特技を持っているわけでもない。

「笑えよ、何が大谷になるだよ」

吉永がこつちを向いているのが、俯いても分かる。

「お前、それは違う。そもそもお前は、大谷を知らない。だから成績が悪くても、お前は大谷を諦めちゃいけない」

吉永が何を言いたいのか、俺にはよく分からなかった。

「高校の頃、大谷の成績は良かったのか？ 大谷は消しゴムを拾ってあげたのか？ そんなの知らないだろ。お前の中の大谷は、全部幻想の大谷なんだよ。想像なんだよ。で

もそれで合ってるんだよ」

吉永が息を吸い込んだ。窓の隙間から入ってきた風が成績表を飛ばした。

「大谷は野球を続けてきた。それで、スターになったんだ。だからお前も、『大谷』を続けろ」

もうなんだかよく分からない。俺は生まれた時から大谷だし、どうして俺は、吉永に励まされて泣きそうになっているんだろう。

ただ一つ分かったのは、俺は翔平のほうにはなれないけれど、吉永がいれば、何者かにはなれるという、根拠のない自信が生まれていることだった。